

グリーン・ノウの堆積する時間：トーリーは物語を探して

——庭の児童文学（その三）——

三 村 明

Lucy M. Boston が自分自身の住居であった十二世紀に建てられたマナー・ハウス Hemmingford Grey をモデルとして書いた *The Children of Green Knowe* (1954) から *The Stones of Green Knowe* (1976) にいたる Green Knowe シリーズの全六作は大きく分けて二つのグループに別れる。一つは、二十世紀の少年 Tolly を中心として、十七世紀の子ども達、Toby、Alexander、Linnet が登場する第一作 *The Children of Green Knowe* と、やはり Tolly と十九世紀初頭の少女 Susan が登場する第二作 *The Chimneys of Green Knowe* (1958)。そして、シリーズ最後の作品で Green Knowe に住んだ最初の少年 Roger d'Aulneaux を主人公とした *The Stones of Green Knowe* である。もう一つのグループは、Ida と難民の子ども達 Oskar と Ping の物語である *The River at Green Knowe* (1959) と、Ping とこのマナー・ハウスに動物園から逃げてきたゴリラの Hanno を主人公とした *A Stranger at Green Knowe* (1961) である。そして、これらの二つのグループを結ぶ作品として Ping と Tolly が力をあわせて現代の魔女 Dr. Melanie Powers から Green Knowe をまもるといふ *An Enemy at Green Knowe* (1964) がある。

このように作品を並べてみて明らかなのは、最後の *Stones* だけがずいぶんあとになって書かれているということである。おそらく、Boston は *Enemy* まででこのシリーズは一旦完結したと思っていたが、語り残したことがあり、その後それが次第に物語としてできあがっていったということなのだろう。さらに他の五作と違ってこの作品だけが現代ではなく十二世紀に舞台を設定し、Roger が十七世紀の Toby 達や十九世紀の Susan、二十世紀の Tolly のもとを訪れ自分が住む館の「未来」をのぞき見るといふ物語は、これまでのシリーズのまとめという役割を担っているように思われる。しかし、Boston はこれまでの物語のなかで説明されずに、引っ掛かりとして残っていたことを説明するだけのためにこの小説を書いたというわけではない。この段階で十二世紀、十七世紀、十九世紀、二十世紀という時間のスケールでこの

グリーン・ノウの堆積する時間：トリーは物語を探して

マナー・ハウスの物語をとらえようとしていたということは、これまでの物語をすっかり包み込む枠組みを与えたことになり、またそこでこの館の始まりについて語るということは物語の根源にさかのぼり作家自身の着想の正体を明らかにするということになるだろう。つまり最初の二作 *Children* と *Chimneys* にみられる特別な場所における時間・歴史の感覚という問題こそが、この作家にとって本来の関心事であったということではないだろうか。そこで、ここでは *Chimneys* と *Stones* を視野に入れつつ *Children* を中心に、このシリーズにおける庭に流れる時間の意味を考えていきたい。

1 居場所を求める子ども達

このシリーズで、Lucy M. Boston は人の抛り所、居場所という問題に一貫して関心を寄せていたように思われる。このシリーズの六篇には、第一作目に登場する Tolly をはじめとして、十二世紀に建てられた石造りのマナー・ハウス Green Knowe に居場所を求め、またこの場所を守ろうとする子ども達が繰り返して登場する。このマナー・ハウスの最初の少年 Roger d'Aulneaux をのぞけば、彼らはいずれも自らの居るべき場所を持たない、あるいは、居るべき場所を奪われた子ども達だ。

1.1. 孤独なノアと箱舟

Children の冒頭、Tolly が紹介される最初の数ページは物語のモチーフを巧みに撚り合せ、作品の基調を的確に作り上げている。最初のパラグラフで提示される主人公の姿は、寄る辺なくちっぽけだ。洪水で水浸しの沼沢地地方をのろのろと走る列車のなかで、Tolly は誰ひとり知る人もなく、「いつものようにひとりきりだった」。さらに、この闇雲に一面を覆った洪水の中を、ひと駅ひと駅止まりながら進む列車もまた、世界の中でひとりきりになっている少年の姿と呼応している。実際、この後で語られるのは、両親は遠く離れたビルマにいて、特に父親が再婚した新しい母と彼がうまくうち解けられずにいること、そして、休みの時彼を預かってくれた校長先生の家でかえって寂しい思いをしたことだ。彼の所在なさは同席した女性たちとの対比によっても際だっている。しかし、彼女たちとの会話で彼は今行こうとしているのが彼自身と深いつながりのある土地であることを知らされる。

‘What’s your name, son?’ asked the fat woman suddenly. ‘I’ve never seen you on this train before.’ This was always a question he dreaded. Was he to say his unexpected real name or his silly pet names?

‘Toseland,’ he said.

‘Toseland! That’s a real old-fashioned name in these parts. There’s Fen Toseland, and Toseland St Agnes and Toseland Gunning. What’s your Christian name?’

‘That is it—Toseland.’ (8)

この名前は、学校では彼に疎外感を味わわせていたのだが、その一方で彼がこの土地の人間であることを示しているのだった。この名前だけで彼はよそ者ではないとわかるのだ。

一方、この洪水は Tolly にノアの方舟を連想させている。もちろん、彼がこれから向かおうとしている曾祖母 Mrs Oldknow の家、Green Noah がこの連想に一役買っていただろう。Tolly が思い描いた方舟はまるでサーカスのようで、子どもらしい奔放な生命力を感じさせる一方で、彼についてもっと大事なことを示している。この物語全体を通して語り手の関心は彼に集中していることは確かだが、語られるのは彼の「現在」であって、彼の「過去」が語られることはほとんどない。たとえば、彼の寄宿学校生活について語られることはごくわずかしかない。つまり、彼に関する物語はほとんど過去形であって、過去完了が現れるのは、彼以外の人物について語られる場面に限られるということだ。これはつまり主人公は語るべき過去をほとんど持っていないということでもある。そして、彼はまるで箱船のように洪水の中に立つ古いマナー・ハウスで過去に出会っていくことになる。旧約聖書のノアは過去の世界と決別し洪水の中を旅した。しかし、同時にノアの箱船は過去を未来に託す一種の記憶装置でもあった。ノアの箱船のイメージは代々受け継がれていたものだ。Mrs Oldknow は Tolly に ‘... all the children used to call it the Ark. Your grandfather did, and he learnt it from his father, who learnt it from his, and so on right away back. But you called it that by yourself’ (22) と言っている。この屋敷はまさに記憶装置であり、ここで彼に欠けていた彼自身の物語に出会うのである。

この幼い孤独で不安なノアは洪水の中ボートで迎えに来た、代々この屋敷に仕える庭師の Boggis に迎えられる。Boggis の最初の一言はここが本来彼の居場所であったことを示しているようでもある。

グリーン・ノウの堆積する時間：トリーは物語を探して

‘Good evening, Master Toseland,’ said Mr Boggis, holding up the lantern to look at him, while Toseland looked too, and saw a nice old cherry-red face with bright blue eyes. ‘Pleased to meet you. I knew your mother when she was your size. I bet you were wondering how you were going to get home?’ It was nice to hear somebody talking about ‘home’ in that way. . . . (12)

ここで早くも彼は自分自身につながる過去と出会うのである。彼が知らない幼い頃の母を Boggis は知っている。彼は自分を取り巻いて流れている時間・歴史をこれまで意識せずにきたのだが、この屋敷では幾重にも積み重なり、その中に彼は入っていかうとしている。

この屋敷に入って最初に彼が見たのが鏡に映った自分の姿であったということは面白い。鏡の持つ意味は多様な解釈が可能だが、この場面で Boston が使った表現は注目する価値がある。“As they stepped in, a similar door opened at the far end of the house and another man and boy entered there. Then Toseland saw that it was only themselves in a big mirror.” (13) ここでは一見何でもない表現をしているようだが、鏡を見たら自分たちが映っていたということではなく、彼が見たのはもう一組の男と少年がドアを開けて入ってくる場所であり、それが鏡に映った自分たちであると気づくのはその後だ。つまり彼は、間接語法の従属節に三人称で現れる一人称のように、自分自身を他者として外から見たということを示すものだ。この玄関ホールには大きな鏡が三枚あって Tolly はそのためどのドアが本物が迷ってしまう。この屋敷には Tolly の寝室となる屋根裏の子ども部屋にさらにもう一枚この部屋をすべて二重写しにする大きな鏡がある。これらの鏡は現実の世界に空いた別の世界への窓のように、二つのレベルで物語が語られるこの小説の入れ子構造のアナロジーのように思われる。そして、この入れ子構造こそが、Tolly が自らの物語にたどり着き自分と Green Noah との結びつきを確認するプロセスとなるのだ。

1.2. 時の地層へ

この物語の世界には二つの時間があるといえるだろう。一つは現実の日常を構成する絶えず流れていく時間。そしてもう一つは、洪水によって運ばれてきた砂礫のようにこの屋敷の庭に堆積し、常にここにある時間だ。二つ目の時間について、Tolly

は初めのうちは気づかない。しかし、この屋敷に世界に入って行くにしたがって、彼は第二の時間がこの屋敷の不可分の一部であることを自然と受け入れていく。この時間があるからこそ彼はこの屋敷が自分の存在を託す拠り所であると思えてくるのだ。

最初、堆積する時間は不思議な形で彼にほのめかされる。居間に入ってきた Tolly を Mrs Oldknow は不思議な言葉で出迎える。

‘So you’ve come back!’ she said, smiling, as he came forward, and he found himself leaning against her shoulder as if he knew her quite well.

‘Why do you say “come back”?’ he asked, not at all shy.

‘I wondered whose face it would be of all the faces I knew,’ she said. ‘They all come back. You are like another Toseland, your grandfather. What a good thing you have the right name, because I should always be calling you Tolly anyway. I used to call him Tolly. Have you got a pet name? I’m sure they don’t call you Toseland at school.’

‘No, I get called Towser.’

‘And at home?’

‘My stepmother calls me Toto, but I hate it. It’s worse than Towser.’

‘I think I agree with you. Here we are all used to Toseland, it’s the family name and doesn’t seem queer to us. So you shan’t be Toto here. Do you mind Tolly?’

‘I like it. It’s what my mother used call me. ...’ (16)

彼は当然のように初めて出会う Mrs Oldknow に対して親しげに寄りかかり、自分が受け入れられることを知っているかのようなのだ。一方、彼女にとって Tolly は初め会う曾孫ではなく、連綿と続くこの家の子どもたちの誰かなのだ。この屋敷には変わらずに常に繰り返されている営みがあり、誰もがその一部なのである。名前は受け継がれ、相貌もまた祖父から孫へと伝わっていく。彼は大海原を独り漂う箱船のように孤独でありながら、同時にこの屋敷の大きな時間の一部になっているのだ。そして、曾祖母は彼を死んだ母親がかつて呼んだ名前と呼ぶ。これは彼が望む形でこの家に受け入れられたことを示すものだ。

しかし彼はまだ、自分の時間もまたその一部となっている大きな時間を意識してはいない。この屋敷を取り巻いて流れる川にはいつも母と同じ Linnet という名の小

グリーン・ノウの堆積する時間：トーリーは物語を探して

舟があるということや何年も使われていなかった子ども部屋の鳥かごに戻ってきたアトリもこのような時間の流れを感じさせるものだろうが、彼にもっともはつきりとこの時間を意識させたのは暖炉の上にかかっていた家族の肖像画だった。この絵に気がついた Tolly は Mrs Oldknow に尋ねる。

‘Granny, they are all looking at me.’

‘I’m not surprised. You have only just come. They must be tired of looking at me.’

‘Who are they?’

‘They are Oldknows. Your family. The boy with the deer is Toby, the other with the flute is Alexander, and the little girl is Linnet. She is six years old. That is their mother in the blue dress.’

‘My mother was called Linnet,’ said Tolly. ‘And that’s you behind them!’

‘It’s their grandmother, Mrs Oldknow.’

‘Is this their house?’

‘Yes, they lived here.’

‘When did they live here?’

‘Oh, a long time ago,’ said Mrs Oldknow, fidgeting and being suddenly very busy about the breakfast table. But Tolly was only seven, and to him a long time ago meant more than seven years. ... (25-26)

「ずっと昔」というのは Tolly の想像を超えたものだが、Mrs Oldknow は肖像画のなかのおばあさんとそっくりで、彼女の説明はこの家族が今生きているのか過去の人々なのか、その両方であるようにも思えるものだ。特に Tolly が死んだ自分の母親のことを述べる単純過去の文を間に挟むことで、この感覚はいっそう強くなっている。

彼はその夜実際にこの肖像画に描かれた子どもたちの声を聞く。この子どもたちが Tolly が物語の最初で望んでいた兄弟のかわりになるのだ。しかし遠く時代を隔てた子どもたちが親しくなっていくということは、そうすんなりと行くものではない。とくに、この屋敷では新顔の Tolly にとって彼らと出会うことだけでも思うに任せず、いらだたしいものでもある。肖像画の子どもたちの中で一番年上の Toby と彼の馬 Feste の物語を聞いた翌日、彼は子どもたちの残した痕跡しか見つけられ

ず次第にうんざりし始め、夜には彼らの歌うクリスマス・キャロルを聴くが、Mrs Oldknow には見えた彼らの姿を見ることができず、落胆と悔しさのあまり泣き出してしまふ。そんな彼を Mrs Oldknow は‘Don’t cry, my dear. You’ll find them soon. They’re like shy animals. They don’t come just at first till they are sure. You mustn’t be impatient.’と言って慰める。

これだけではこの物語は一種のゴースト・ストーリーになってしまう。たしかに *Children* だけを読めばこれがゴースト・ストーリーだと考えて不都合な点はなにもないのだが、次に書かれた *Chimneys* で Boston は Mrs Oldknow の口を借りて‘Ghost! What a thing to call them!’と言わせてそれを否定し、そしてかわりに彼らを‘the others’と呼ぶ。誰も知れない声の子守歌に歌う ‘Coventry Carol’に合わせて Tolly が歌い、四百年の彼方で赤ん坊が眠っていく場面に見られるように、‘the others’の存在はこの屋敷に積もった重層の時間を示すものだ。そして実際に *Chimneys* では Tolly が十九世紀初めの子どもたちに対して何かをするということが描かれ、Boston がこれをゴースト・ストーリーとして書いているのではないことは明らかになるのである。Mrs Oldknow が Tolly に語る彼らの物語は、その時間を説き明かし Tolly を時を越えて一つの庭に遊ぶ子どもたちの中に加えるイニシエーションのようにも思われる。そして当然ながら、その要素は第一作である *Children* において、より際だっている。

2 自己の物語へ

この小説の中で Mrs Oldknow は Tolly に四つの物語を語る。肖像画の三人の子どもたちについて一つずつ、そして、庭にある奇妙なトピアリー-Green Noah の由来についての物語が一つ。Mrs Oldknow は Green Noah の物語の本当の結末を語ろうとはしなかったが、Tolly は祖母の友人が送ってきた雑誌の記事を読み伝説の全容を知る。これら小説の中に埋め込まれた物語は、Tolly にとって遠いかけ離れた過去の物語ではない。それはこの屋敷に現に生きている「今」の物語でもあった。これらの物語を通じて Tolly は自分の居場所となるべきこの屋敷の世界を了解していくのである。そして最後にそれは連なり一つの物語となり、彼自身の物語となるのだ。

Mrs Oldknow の語る物語は、次の出来事へとつながり、出来事はまた次の物語へとリンクしていく。さらにそこに絡み合った二つの時間が重なってくる。語りの二つのレベルと時間の二つの層（ただし「今」についての「物語の中の語り」は注意

グリーン・ノウの堆積する時間：トリーは物語を探して

を引くような形では現れてこない) を行き来し時には横断してストーリーが進むうちに、Tolly はすべての物語が歴史の中のいずれかの時に位置づけられ、そしてそれは自分に向かって流れていることを知る。いやむしろ、この屋敷に堆積した時がこの語りによって掘り起こされ、Tolly は二つの時代を経験して、この屋敷の時間的大きさを感じとっていくと言った方が正確かもしれない。

2. 1. 物語は語られる

先に見たように Mrs Oldknow が語る最初の物語は Toby と Feste の物語であった。この話は Tolly を憧れの気持ちで満ちし、そのつぎの夜 Tolly はこの馬の声を聞く。さらに翌朝アトリが見つけた鍵で Tolly たちは子どもたちのおもちゃ箱を開ける。この場面は『秘密の花園』を思わせるが、バーネットの小説でメアリーが自分の居場所となる閉ざされた庭へコマドリが見つけた鍵で入っていったのと同様に、この鍵で Tolly は子どもたちのよりパーソナルな領域へと入っていくことになる。おもちゃ箱には子どもたちの一番身近なものがしまわれている。このおもちゃ箱から様々なものを取り出しながら Mrs Oldknow は子どもたちのことを Tolly に語っていく。これは、彼らの生活ぶりを Tolly に伝えるだけではなく、読者の歴史的想像力を刺激する一節だ。二人はそこに Alexander のフルートや Toby の剣、本やロシア土産のマトリョーシカ、ドミノなど子どもたちの持ち物を見つける。Tolly にはこれが子どもたちの楽しみや関心を共有する手がかりとなり、彼らと出会うきっかけともなっていく。Tolly がこの箱にあったフルートを初めて吹いたとき、この楽器はまるで覚えてでもいるかのように、Alexander がかつて吹いていたメロディーを奏でた。Tolly は Alexander と重なり合い、彼が二度目に子どもたちに出会ったとき Alexander は 'I've given it to you' と言って、フルートは Tolly のものになった。しかし、後に語られる Alexander の物語ではこのフルートの由来が語られてはじめて、本当の意味でこのフルートは Tolly のものとなる。背景にある物語を知って初めて、この一本のフルートは生きた経験として、Tolly にとって意味のあるものとして了解されたといえるだろう。

Linnet について語られる物語はこの屋敷の守護ともなっている St Christopher 像の話で、四つの話の中でもっとも短いものだ。像が作られた経緯は後に *Stones* で初めて語られるのだが、この聖人の異教的な背景にふさわしく、家の中の秩序正しい空間（特に *Chimneys* の Susan と Jacob にとっては、清教徒的で厳格な祖母がいる家は

窮屈な場所だった)とは対照的に、子どもたちが自由に遊ぶ庭の中心になっているようだ。Tolly は初めて庭の探検に出たときに幼子のキリストを肩に乗せて川を渡る巨人の像に気づく。

Tolly was astonished. He looked and looked at it and could not go away. He played round its feet for a long time, collecting coloured pebbles out of the gravel, and stones that were like different things, such as a peg-top, an egg, a calf's face, a hammer-head; and a real marble. Every now and then he would look up to see the statue again. Its surface was worn soft by rain and frost and wind, not shiny and hard like monuments in churches. It looked friendly and nearly alive. Tolly loved it. (43)

見知らぬ庭に初めて出てきた Tolly もその足下で安心して遊びなかなか離れようという気にならない。彼はいつもこの庭にいるすべての子どもたちを見守っている。Linnet がクリスマス・イヴに見た St Christopher 像の物語はこの石像が生きているということを語っている。建物と同じ生きた石で作られた聖人像は、Jon C. Stott がいう ‘those who approach Green Knowe with the proper attitudes’を見分け、誰を受け入れ誰を拒絶するか決定するこの屋敷の意思の象徴のようだ。^(註1)

この庭には St Christopher 像と対極をなすかのようにもう一つ大きな姿がある。Boggis の祖父が酔っぱらって作ったというトピアリー Green Noah である。この人の形に刈られたトピアリーの名前は誤っていつの間にか、本来の名前 Green Knowe に替わって、屋敷の名前として通るようになっていた。Mrs Oldknow は Tolly がこの木に気づくことにすら気遣わしげだったのだが、彼女が二番目に語った Black Ferdie の物語は Green Noah の由来に関わるものだった。しかし、Green Noah に向けられた呪いのくだりにさしかかる直前で、質問する Tolly をさえぎって彼女はこの物語を不自然にも切り上げてしまう。彼女は度々この屋敷のネガティブな側面に彼が触れるのを避けようとする。

Tolly にこの木に気をつけるように教えたのは子どもたちであった。しかしこの後の彼の様子を見ると、Tolly はこの忠告を気にとめてはいなかったようだ。部屋に戻って Mrs Oldknow に会ってからも彼は Green Noah のことにはふれていない。彼が伝説の結末を知ったのは、Mrs Oldknow が出かけている間に、彼女の友人から届いた雑誌を見ているときだった。その日の朝、彼は初めて Green Noah に気づき、恐ろしく

グリーン・ノウの堆積する時間：トリーは物語を探して

なって逃げ出していた。Tolly は雑誌の記事を読んだのは午後になって Boggis が帰ってからだった。帰ってきた Mrs Oldknow は安心させようとするのだが、Green Noah の恐ろしい印象は消えず、その夜彼は怖い夢を見ることになる。

このようにして Tolly は、一つの小宇宙としての、この屋敷の世界像を次第に自分のものにしていった。しかし、彼はまだこの世界の「語られる時間」の住人とはなっていない。先に見たように、彼に足りないのは自分自身に関する物語であったのだ。彼がこの庭で、後々語られることになるような、‘Tolly’s Story’を持つことが、彼が ‘the children of Green Knowe’の一人になるためには必要なのだ。そのためには彼が何かをすることが必要になる。

2.2. ‘It was ME,’ said Tolly triumphantly.

振り返ってみると、Children において Tolly は不思議なほど何もしていない。彼がおもにしてきたのは、聞くこと、見ること、そして感じとることだった。彼が自分を取り巻く世界を受け入れることがこの作品のテーマの一つであるから、どうしてもそうならざるをえない。だからこそ語りに取り入れられた四つのエピソードは、テーマの上でだけでなく、子どもの読者を飽きさせず引きつけていく上でも、重要なものになる。やや散漫な印象を与えていることは否めないものの、物語全体は Tolly がまっ暗な庭で迷子になり Green Noah に襲われそうになるクライマックスに向かって周到に組み立てられている。ここで初めて彼は何かをなしたといえるだろう。彼は Green Noah の最期の一因となりまた目撃者となることで、その伝説の一部となったのだ。

だからこの危機の場面で、まず Tolly が所有／所属に関する不安をおぼえるのは当然といえるだろう。

He was alone, and the garden seemed no longer his. He felt like a trespasser as he moved along it. The thought reminded him of Black Ferdie. He wished he had gone straight to Feste’s protective stall. His flashlight was growing weaker and weaker. It was only a little pin of light. He shook it. It died out altogether. ... (135)

この庭は彼のものではなく、彼もこの人間ではない。彼の弱々しい懐中電灯は彼がやってきたときポートの触先で心細げに掲げていたランプに対応するものだろう。

あのときのランプは希望の光でもあったが、今度の懐中電灯は消えてしまい彼は暗闇に取り残される。しかし彼はこの庭から排除されるべき者ではなかった。彼が恐怖に立ちすくみ、助けを求めて Linnet を呼ぶと、Linnet や Toby、Alexander だけではなく、大勢の子どもたちが St Christopher に呼びかける声が聞こえる。彼はこの庭の子どもたちの一人として受け入れられたのだ。これが Tolly の最初の物語となる。

第二作 *Chimneys* では、Mrs Oldknow の語る過去の物語と Tolly の宝探しはもっと密接にリンクし並行して進んでいく。どのエピソードも Susan と Jacob に関わるもので、見通しよく構成されていてよく計算された感じがする。(しかし、その分だけ過去のエピソードと現在の出来事との関連性があからさまで予想がつくものになってしまい、繰り返し読むとアクションの面白さの一方で、深みに欠けるところがある。) この小説の結末で Tolly は長い間失われていた Susan の母親の宝石を見つけ、Mrs Oldknow が Toby たちの肖像画を手放さなくても、Green Knowe を維持していくことができるようになる。Tolly は破滅の危機から Green Knowe を救ったことになる。これはこれで大活躍であり、Green Knowe の物語の一つとして語り継がれるものとなるのだろうが、それ以上に興味深いのは ‘The Captain’s Return’ と題されたエピソードである。

このエピソードで Tolly は Mrs Oldknow も知らなかった事実を知っていたのである。腹黒い召使いの Caxton にそそのかされて密猟をしたために、なかば人さらいのように水兵を徴募する Press Gang に連れて行かれそうになっていた Fred Boggis を、Susan と Jacob がかくまい、Captain Oldknow に訴えて救い出すという話である。この話の中で、地下のトンネルに隠れていた Fred に食べ物とろうそくを持ってきた少年がいるのだが、それこそ Tolly であったのだ。Mrs Oldknow はずっと Alexander がやったのだと思っていたという。‘I know he had candles, but, Granny, he was scared.’ と Tolly が言うのを聞いて驚いた Mrs Oldknow に対して、彼は ‘It was ME’ と誇らしげに答える。彼はすでに Green Knowe の物語の一部として語られていたのである。言ってみれば彼は百五十年も前から Green Knowe の一員だったのだ。

この物語世界の時間は我々の世界観を作り上げている科学的・物理的時間とは全く違う働き方をしている。すべての時間は語りの力によって常に「今・ここに」あることができる。いやむしろ、過去があるのは語りの過去時制によって今という時間に挿入されたものとしてでしかないようにさえ思える。語りの言葉は記憶の中に積み重なり、それは地層に埋もれた遺跡のように掘り返すことができる。ただ違う

グリーン・ノウの堆積する時間：トリーは物語を探して

のは、随意に掘り返すことができるということであり、語られる相手は語り手によって選ばれるということだ。相応しい者にとっては、Green Knowe の時間は過去も現在も、そしておそらく未来も、同時にその庭に積み重なっているのだ。そのため、この庭は周りを取り巻いて流れる川（これが時を表すメタファーであることは言うまでもない）によって囲い込まれた'timeless'な世界となっている。

3 時の降り積もる庭

二十世紀半ばの Green Knowe を訪れた Roger はあまりに変わってしまった周囲の世界に 'The world seemed nearly dead. Could there have been a dreadful plague that had killed the lovely worldful?' (Stones, 103) という感想を抱く。しかし、マナー・ハウスに近づくと様子は一変する。多くの植物に囲まれ鳥たちが遊ぶこの屋敷の庭は、あたかも死に絶えつつある世界の中に残された最後の楽園のようだった。隣接する林は刈り込まれ小さな木立になったとはいえ、彼の知っている世界だ。ここは八百五十年の時を隔てても彼の居場所なのだ。 'This was his house, his land where surely he had a right to be, where he was coming to meet others who also were there by right, loving it as he did. He forgot the nightmares he had on the way here. This was Green Knowe.' (108) Roger を怯えさせた外の世界で起こる変化や押し寄せてくる新しいテクノロジーの中にあっても、Green Knowe は Green Knowe のままであり続けている。変化していないというわけではない。いや絶えず変化し続けているのだ。しかしこの庭では時間は流れ去りはしない。どの時代も何らかの痕跡としてここに生き続けているだけでなく、物語として、そしてその物語を甦らせる 'the others' としてこの屋敷の時間を織り上げている。

Roger がやって来たのは Tolly と約束したからだった。ブナの木の下で合うという約束だった。この堂々とした大きな木は、Tolly が初めて Toby 達にあったイチイの木と同様に、子どもたちの隠れ家となり遊び場となっていた。囲われ保護された世界の中の、二重に囲われた秘密の世界である。ここに 'the others' が集まってくる。長くなるがこの場面を引用してみよう。

'Jacob here, Missy.' Orlando sprang to him and wagged a special welcome.

'Well done,' said Susan. 'That makes four of us.'

‘If I’d brought my flageolet,’ said Roger, ‘I might have been able to find Alexander. We share a tune too.’

‘I’ve been here all the time,’ said Alexander, who was sitting in the undergrowth speckled all over with dancing lights so that he was very nearly invisible. ‘I’ve been having a flute conversation with a thrush.’

‘That makes five.’

A voice outside in the open said. ‘Come on, Toby, Alexander’s under the beech tree, I heard him imitating the thrush.’ The leaves were lifted and Linnet, nursing a leveret, came in followed by Toby leading a beautiful fallow deer with a jewelled collar.

‘Oh,’ said Linnet, ‘here’s my Roger again. How alike he and Tolly are! At first I thought it was the same boy, but Roger looks fiercer.’

‘The grandmother thought I was Tolly.’

‘Oh, well,’ said Tolly, ‘she gets mixed up. She often calls me Toby.’

‘Six, seven,’ said Susan. ‘Who’s “real” today?’

‘It’s Tolly today,’ said Roger.

The curtain was parted yet again, and this time a tall slime girl came in. She was the same age as Toby and just as beautiful, with long shining hair. She hesitated just inside the circle, like someone who is lonely.

‘May I come in?’ she said. ‘I was thinking of you all and couldn’t bear to be left out. It was my beech tree too.’

‘That makes eight,’ said Susan. ‘Who is it?’

‘It’s me, you know.’

Tolly laughed and ran across to her.

‘I know you,’ he said, taking her hand. ‘I’d know you anywhere, any time. You’re my grandmother. There’s only one of you.’

‘Dear Tolly! I’ve always lived here you know. I’ve seen and heard them all often.’ (111-12)

これまでに出てきた ‘the others’ が一同にそろい、誰もがこの庭の一部となっている。このあとで、後に Mrs Oldknow となる少女は Roger に指輪を手わたし、それは子孫から子孫へと伝えられ再び彼女のもとへ帰ってくる。

グリーン・ノウの堆積する時間：トリーは物語を探して

この庭を囲んで流れる川の輪の中に、ブナの木が大きな影を落として包み込む輪があり、その中にさらに ‘the others’ が輪をつくっている。その輪の中で、もう一つ、時間を超えて輪が結ばれる。始まりであるにしる終わりであるにしる、ここで円環が完結する。この重なり合う円環は、しかしながら、『秘密の花園』の場合のように、野生のエネルギーを送り込むムーアに囲まれているわけではない。Jon Stott がこの連作にパストラルのパターンを見いだしているように、この庭は絶えず外の墮落した世界に脅かされているのだ。最初に見た箱船のイメージは再び意味を持つ。ノアの箱船は世界の縮図であり、新しい世界へ古い世界を伝えるための最初の人工バイオスフィアであった。Green Knowe は、荒海を乗りきる箱船のように、外界の脅威と戦いながら生き延びて行かねばならない。The King Stone と The Queen Stone を博物館に持っていく工事をしているショベル・カーを見て驚嘆している Roger に Tolly は ‘It happens. ... But my grandmother and I do all we can to prevent it. She fights for Green Knowe every day of her life. We didn’t know about this.’ (120-21) と言っているように。

Boston は人類の未来に対して悲観的であったとは思われない。しかし、手放しで楽観的な世界像を子どもたちに与えてなどはない。Stones 最後に出てくる Schweppe の空き瓶のエピソードに見られるように、彼女は現代の文明に対して批判的な目を持って、その中で守られるべき価値とは何か、伝えられるべき過去とは何か、歴史の中のどこに自分がいるのかを問いかけている。彼女が子どもたちに伝えようとしている希望はその上での希望なのだ。

最後に Tolly はこう言っている。

... ‘Now I shall never be able to come to you again. I shall never see your house as it was.’

‘As it is,’ said Roger, finding his wits again. ‘And that means I can see you again because *in my time* the Stones are still there.’

He was alone, and the Stones were standing in their place, throwing shadows before them. (121)

物語はまだ終わることはなく、物語とともに時は Green Knowe に堆積し、語られるままに甦ってくる。

引用文献および参考資料

- Boston, Lucy M. *The Children of Green Knowe*. London: Faber, 1954. Harmondsworth, Middlesex: Puffin, 1975.
- . *The Chimneys of Green Knowe*. London: Faber, 1958. Harmondsworth, Middlesex: Puffin, 1976.
- . *The Stones of Green Knowe*. London: Bodley Head, 1976. Harmondsworth, Middlesex: Puffin, 1979.
- 秋山さと子『『グリーン・ノウの子どもたち』（ルーシー・M・ボストン作）』『子どももの情景』大和書房、1985.
- Egoff, Sheila A. *Worlds Within: Children's Fantasy from the Middle Ages to Today*. Chicago and London: American Library Association, 1988. 159-62.
- 本多英明「魂の避難所——L.M.ボストン『グリーン・ノウ物語』——」『英国の子どもの本』新人物往来社、1983.
- Rosenthal, Lynne. 'The Development of consciousness in Lucy Boston's *The Children of Green Knowe*.' *Children's Literature* 8, 1980. 53-67.
- Stott, Jon C. 'From Here to Eternity: Aspects of Pastoral in the Green Knowe Series.' *Children's Literature* 11, 1983. 145-55.
- Townsend, John Rowe. 'L. M. Boston.' *A Sense of Story: Essays on Contemporary Writers for Children*. Boston: Horn Book, 1971. 28-38.

脚注

(1) Tolly は来てすぐにこの屋敷が生きているという印象を持った。

The room seemed to be the ground floor of a castle, much like the ruined castles that he had explored on school picnics, only this was not a ruin. It looked as if it never possibly could be. Its thick stone walls were strong, warm and lively. It was furnished with comfortable polished old-fashioned things as though living in castles was quite ordinary. Toseland stood just inside the door and felt it must be a dream. (15)